

# 青い時計台

小川未明

青空文庫



さよ子は毎日、晩方になりますと、二階の欄干によりか  
 かって、外の景色をながめることが好きでありました。目のさめ  
 るような青葉に、風が当たって、海色をした空に星の光が見え  
 てくると、遠く町の燈火が、乳色のもやのうちから、ちらち  
 らとひらめいてきました。

すると毎日、その時分になると、遠い町の方にあたって、な  
 んともいえないよい音色が聞こえてきました。さよ子は、その音  
 色に耳を澄ましました。

「なんの音色ねいろだろう。どこから聞きこえてくるのだろう。」

と、独り言ひとごとをして、いつまでも聞きいていきますと、そのうちに日ひが  
まったく暮くれてしまつて、広い地ひろ上ちじょうが夜よるの色いろに包つつまれて、だん  
だん星ほしの光ひかりがさえてくる時じぶん分ぶんになると、いつともなしに、その音ね  
色いろはかすかになつて、消きえてしまふのでありました。

また明あくる日ひの晩ばん方がたになりますと、その音おとが聞きこえてきまし  
た。その音おとは、にぎやかな感かんじのするうちに、悲かなしいところがあ  
りました。そして、そのほかのいろいろの音ねいろ色いろから、独り離ひとれはなれて  
いて、歌うたをうたつているように思おもわれました。で、ここまで聞きこ  
えてくるには、いろいろのところが歩あるき、また抜ぬけたりしてきた  
のであります。町まちの方ほうには電でん車しやの音おとがしたり、また汽き車しやの笛ふえの

音<sup>おと</sup>などもしているのでありました。

さよ子<sup>こ</sup>は、よい音色<sup>ねいろ</sup>の起<sup>お</sup>こるところへ、いつてみたいと思<sup>おも</sup>いました。けれども、まだ年<sup>とし</sup>もゆかないのに、そんな遠<sup>とお</sup>いところまで、しかも晩<sup>ばん</sup>方<sup>がた</sup>から出<sup>で</sup>かけていくのが恐<sup>おそ</sup>ろしくて、ついにゆく氣<sup>き</sup>になれなかつたのでありますが、ある日<sup>ひ</sup>のこと、あまり遅<sup>おそ</sup>くならないうちに、急<sup>いそ</sup>いでいつてみてこようと、ついに<sup>で</sup>出かけたのであります。

一一

さよ子<sup>こ</sup>は、草<sup>くさ</sup>原<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>につづいている小<sup>こ</sup>径<sup>みち</sup>の上<sup>うえ</sup>にたたずんでは、

幾たびとなく耳を傾けました。西の方の空には、日が沈んだ後の雲がほんのりとうす赤かった。さよ子は、電車の往來しているにぎやかな町にきましたときに、そのあたりの騒がしさのために、よい音色を聞きもらしてしまいました。これではいけないと思つて、ふたたび静かなところに出て耳を澄ましますと、またはつきりと、よい音が聞こえてきましたから、今度は、その音のする方へずんずん歩いていきました。いつしか日はまったく暮れてしまつて、空には月が出ました。

さよ子は、かつて、きたことのないような町に出ました。西洋ふうの建物がならんでいて、通りには、柳の木などが植わっていました。けれども、なんとなく静かな町でありました。

さよ子はその街まちの中なかを歩いてきますと、目の前めまへに高い建たて物ものがありました。それは時計とけい台だいで、塔とうの上うえに大おおきな時計とけいがあつて、その時計とけいのガラスに月の光つきひかりがさして、その時計とけいが真まつ青さおに見みえていました。下したには窓まどがあつて、一つのガラス窓まどの中なかには、それは美しいものばかりがならべてありました。金きん銀ぎんの時とけい計けいや、指ゆび輪わや、赤あか・青あお・紫むらさき、いろいろの色いろの宝ほう石せきが星ほしのようかに輝かがいていました。また一つの窓まどからは、うすい桃もも色いろの光こう線せんがもれて、路みちに落おちて敷しき石いしの上うえを彩いろどっていました。よい音色ねいろは、この家いえの中なかから聞きこえてきたのであります。

さよ子こは、家いえの中なかがにぎやかで、春はるのようきな気き持もちがしましたから、どんなようすであろうと思おもつて、その窓まどのきわに寄より添そつて、

そこにあつた石を踏み台にして、その上に小さな体を支えて中をのぞいてみました。

へやの中はきれいに飾つてあります。大きなランプがともつて、うす赤いガラスの花がさが懸かっています。

そこに大きなテーブルが置いてあつて、水晶で造つたかと思われるようなびんには、燃えるような真つ赤なチューリップの花や、香りの高い、白いばらの花などがいけてありました。テーブルに向かつて、ひげの白いじいさんが安楽いすに腰かけています。かたわらには三人の美しい姉妹の娘らがいて、一人は大きなピアノを弾き、一人はマンドリンを鳴らし、一人はなにか高い声で歌っていました。それが歌い終わると、にぎやかな笑い



声が起こつて楽しんで、笑い顔をして目を細くして、三人の娘らの顔を見比べているようでありました。

## 三

さよ子は、この世間にも、楽しい美しい家庭があるものだと思  
 いました。あまり遅くならないうちに帰らなければならぬと思つ  
 て、窓ぎわを離れてから振り向くと、高い、青い時計台には流  
 るような月光がさしています。そして町を離れて、野原の細  
 道をたどる時分にはまた、彼のよい音色が、いろいろの物音

あいだの間をくぐり抜けてくるように、遠く町の方から聞こえてきました。

その翌日から、さよ子は二階の欄干に出て、このよい音色に耳を傾けたときには、ああやはりいまごろは、あの青い時計台の下で、あの親孝行の娘らが、ああして、ピアノを鳴らしたり、歌をうたったり、マンドリンを弾いたりして、年老つた父親を慰めているのだらうと思いました。そして、美しく飾りたてたへやのようすなどを目に描きました。

ある日のことでありました。毎日のように町の方から聞こえてくるよい音色が、ひじょうに悲しみを帯びて聞こえてきましたので、さよ子はどうしたことかと思つて、ついまたそこまでいつ

てみる気になりました。

さよ子は、今度は路を迷わずに、その町にくることができました。月はすこし欠けていましたけれども、やはり流るるような青い青い光は、時計台を照らして、高い塔が夜の空にそびえているのを見ました。さよ子は例の窓のところに来て、石の上に立つてのぞきますと、へやのようすにすこしも変わりがなかつたけれど、大きなテーブルのそばのベッドの上には、年老つた娘らの父、親が横たわっていました。三人の娘らは、当時のように笑いもせず、いずれも心配そうな顔つきをしていました。やがて父親は、なにかいつて金庫の方を指さしました。するといちばん年上の娘が、その金庫の方に歩いて行って、そのとびらを開

ました。そして中なかから、たくさんの金貨きんかを盛もつた箱はこを、父親ちちおやの  
 ねているまくらもとに持もつてきました。父親ちちおやはなにかいっ  
 ましたが、やがて半はん分ぶんばかり床とこの中なかから体からだを起おこして、やせた  
 手てでその金貨きんかを三人にんむすめの娘むすめらに分わけてやりました。  
 この光景こうけいを見みたさよ子は、なんとなく悲かなしくなりました。そ  
 して家いえへ帰かえる路みちすがら、自分じぶんもいつかお父とうさんや、お母かあさんに別わか  
 れなければならぬ日ひがあるのであろうと思おもいました。

## 四

あいかわらず、その後ごも、町まちの方ほうからは聞き慣なれたよい音色ねいろが

聞きこえてきました。乳ちち色の天あまの川がわが、ほのぼのと夢ゆめのように空そらを流ながれていきます。星ほしは真しん珠じゆのように輝かがやいています。その夜よ、町まちの方ほうからは、これまでにないよい音色ねいろが聞きこえてきました。その音おとはいつもよりにぎやかそうで、また複ふく雑ざつした音色ねいろのように思おもわれました。さよ子はまたそこまでいってみたくなりました。

彼かの女じよはまた、その家いえの窓まどの下したにきて、石いしの上うえに立たつて中なかをのぞいてみました。すると、へやの中なかのようすは、これまでとはすつかり変かわっていました。もつと美うつくしく、もつときれいに、もつと珍めづらしいものばかりで飾かざられているばかりでなく、三人にんの娘むすめらのほかに、見み慣なれない年とし若わかい紳しん士しが四よ、五人にんもいました。それらおとこの男おとこは、楽が器つきを鳴ならしたり、歌うたをうたつたりしました。娘むすめらは、

いずれも美しく着飾きかざつて、これまでになくきれいに見えみました。

そしてテーブルの上うえには、いろいろの花はなが咲さき乱みだれているばかり

でなく、桃もも色のランプの外ほかに緑みどり色のランプがともつて、楽ら

くえん

園かにきたような感じかんがしたのであります。けれど、ただ一人父ひとりち

ちおや

親おやの姿すがたが見みえませんでした。これらの若わかい男おとこや、女おんなは、たがい

によい声こゑで歌うたい、また話はなし、また手てを引き合あつて舞踏ぶとうをやつてい

ました。

その夜よさよ子は、家いえに帰かえるときに考かんがえました。どうしてあの人ひ

とびと

々は、ああして楽たのしく遊あそんでばかりいられるのだらう……と、

思おもうと、なんとなく、不思議ふしぎでならなかつたのであります。

その後のちというものは、毎夜まいよ、さよ子は町まちの方ほうから聞きこえてくる

よい音色ねいろを聞きくたびに、不思議ふしぎな思おもいをせずにはいられなくなりました。

やがて、紅あかく燃もえていたような夏なつが逝ゆきかけました。つばめは海うみを渡わたつて、遠とおみなみとこなつくにかえる時じ分ぶんとなりました。ある夜よ、さよ子こは二階かいの欄らん干かんに出でて、涼すずしくさえた星ほしの光ひかりを見みながら、町まちの方ほうから聞きこえてくる、よい音色ねいろに耳みみを澄すまそうとしたけれど、どうしたことか、聞き慣なれたその音色ねいろは聞きこえてこなかつた。明あくる日ひもやはり聞きこえてこなかつた。

さよ子こは、いぶかしく思おもつて、その町まちにやつてきました。すると、その家いえは堅かたく閉しまつて、店てん頭とうに売うり家やの札ふだがはつてありました。独ひとり、高たかく時と計けい台だいは青あおく空そらに突つつ立たつて、初はつ秋あきの星ほしの

光<sup>ひかり</sup>が冷<sup>つめ</sup>たくガラスにさえかえっていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「処女」

1914（大正3）年6月

※表題は底本では、「青《あお》い時計台《とけいだい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 青い時計台

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>